

おける害菌は多いものでも3種類であった。しかし、対照区には薬剤処理区以上に3種類の害菌をつけた櫛木が多かった。なお第2年目には1櫛木についている害菌数は増した。そして、メッキンコート・T区、モニン乳剤区、対照区にわずかではあるが4種類の害菌を着生するものもみられた。

害菌の種類としては本数の上からも対照区にもっとも多くのがみられた。しかし、薬剤処理区の間にも頻度の上からは大体同じような傾向がみられた。第1年度の伏込みの状態において多かったものはダイダイタケ、カワラタケ、ゴムタケなどの比較的湿性菌であり、クロコブタケ、スエヒロタケなどのやや乾性的な種類のもが少しみられた。しかし、第2年度の立込みの状態ではダイダイタケ、カワラタケの発生櫛木は前年度と変らなかったがクロコブタケ、キウロコタケ、キクラゲなどの増加がみられ立込み場所の乾性度を

を示すものが現れた。たゞ湿性菌とみられるアナタケが各処理にみられたのは櫛場の状況と一致しないように思はれた。

つぎに薬剤処理とシイタケ子実体の発生量との関係であるが、第2表に示したように薬剤処理をおこなったものは対照区に比較してかなりの収穫がみとめられた。この点については今後の薬剤使用の上で効果のあることといえるようである。

以上の結果から、薬剤によって害菌による被害櫛木の増加をよく制し、あるいは被害面積を減少させることは生態的性質を異にする害菌が多いため、困難のようであるが伏込みの時期において櫛木の取扱いに注意した上で、薬剤効果の持続性のあるものを見出す必要があると思はれる。たゞ試験に使用した薬剤の中ではモニサイドのように害虫防除剤をもとり入れた水銀剤は効果あるものの1つと思はれる。

第2表 シイタケ子実体の発生量

項目	処理区	メッキンコート・T	アンチファンギロン	モニン乳剤	モニサイド	対照区
生重量(g) ^{※1}		5,775	4,773	4,945	6,807	2,679
指数 ^{※2}		216	178	185	254	100

※1 原木1㎡あたりの発生量

※2 対照区を100とする

21. スギハダニ駆除試験について

九州林産K・K 東 島 司

I ま え が き

九州電力社有林内のスギ林分に最近スギハダニの発生が相つぎ、その駆除を行うのと併行してスギハダニの生存数の年間消長及び各種薬剤による駆除試験を昨年8月より1年間にわたり調査してみたのでその結果を報告する。

II 試験地の概況

調査箇所は宮崎県東臼杵郡北方村大字ウルシ藪にある九州電力社有林62林班内小班内のスギ12年生林分で、標高300~350m方位N・E、傾斜15~25°、年平均

気温16.7°C、年降水量2,400mmである。

III 試験方法

- (イ) 試験区は7プロット(処理区6、対照区1)を4回くり返しの乱塊法により設定し、1プロット8m×8m(64㎡)としてプロット間に3m巾の緩衝地帯を設けた。1プロット内の平均立木本数は21本である。
- (ロ) 使用薬剤はネオサップピラン粉剤及び水和剤テデオ粉剤及び水和剤・DN粉剤・エラジトン水和剤の6種で第1表参照 背負式撒粉機及び背負式自動噴霧器

を用いて均等に撒布した。

(イ) 使用薬剤は第1表の通りであるが水和剤については、1,000倍液を使用した。

(ニ) 撒布は次の5回行った。

S39年 9月1日

“ 12月1日

S40年 4月30日

“ 6月30日

“ 7月30日

またスギハダニ生存数の調査は月2回計24回行った。

(ホ) 生存数調査は調査日毎に各プロットから任意に1本選び樹高の3/4の部位より略等重量の1枝を採取し白紙の上により落ちてルーベにより確認した。

IV 試験結果の考察

調査の結果スギハダニの生存数は第2表及び第1図の通りである。またこれを分散分析したのが第3表であり処理間に著しい有意差を生じた。

生存数の少いのはエラジトン水和剤区で無処理区を100とした場合9と約1/10の値になっている。

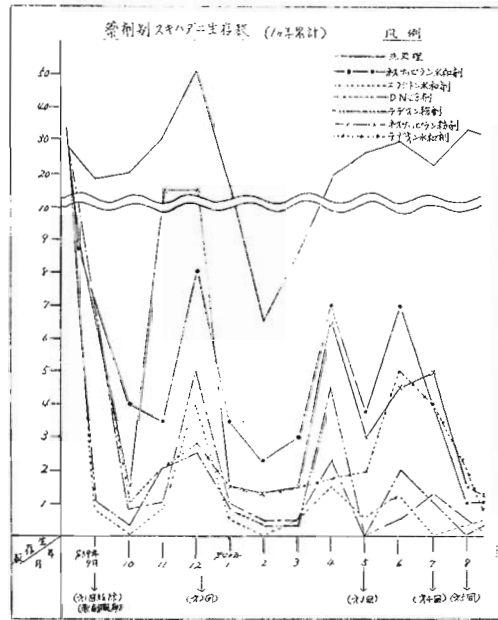
水和剤と粉剤とでは、はっきりした効果の差は出ていないが、ネオサップランは水和剤及粉剤とも他薬剤

と比較すると効力がおちるという結果が出た。

また必要経費を計算したのを第1表に掲げた。

以上

図—1



第1表 試験薬剤名別使用数量及経費内訳表

項目 薬剤名	1 a 当薬剤 使用数量	試験区画 縦 横	総面積 ㎡	使用薬剤 数量	薬 剤 単 価	薬 剤 代	薬 剤 運搬費	作業費	合 計
	g			Kg	円	円	円		
ネオサップラン粉剤	600	8.0m × 8.0m × 4ヶ所	256	1.54	Kg 65	100	12	64	176
テデオンの粉剤	600	“	“	“	Kg 145	223	12	64	299
D N 粉 剤	600	“	“	“	Kg 63	97	12	64	173
ネオサップラン水和剤	10	“	“	25.6	100 g 90	23		80	103
テデオンの水和剤	10	“	“	“	100 g 125	32		80	112
エラジトン水和剤	10	“	“	“	100 g 290	74		80	154
無 処 理		“	“						

※ 使用薬剤数量及経費内訳は撒布1回についてのもの

第 2 表 ブロック別生存数（1ヶ年累計）

処 理	ブ ロ ッ ク				計	平 均	百 分 比
	1	2	3	4			
	匹	匹	匹	匹	匹	匹	%
ネオサッピラン紛剤	117	142	119	101	479	119.8	23
テデオノ紛剤	71	54	69	90	284	71.0	14
D N 紛 剤	78	63	61	57	259	64.8	12
ネオサッピラン水和剤	120	132	107	129	488	122.0	24
テデオノ水和剤	94	90	91	91	366	91.5	18
エラジトン水和剤	50	32	56	54	192	48.0	9
無 処 理	509	498	524	507	2,038	509.5	100
和	1,039	1,011	1,027	1,029	4,106		

第 3 表 分 散 分 析 表

要 因	平 方 和	自 由 度	平 方 平 均	F
ブロック	57.572	3	19.190	1.26
処 理	637,780.929	6	105,463.488	6,931.09
誤 差	2,739.000	18	15.216	
和	635,577.500	27		
処理**	6,931.09 >	F0.01	4.01	
ブロック	1.26 <	F0.05	3.16	

22. フサアカシアの炭疽病防除に関する研究（第5報）

播種時期と薬剤撒布時期について

福岡県林業試験場 橋 本 平 一

はじめに

アカシア類の育苗は早春に播種して、梅雨期に床替を行うのが慣行法となっている。この方法は病原菌の繁殖時期が苗木の抵抗力の弱い幼若期と一致するために、炭疽病に罹りやすいものと思われる。演者は稚苗期を病原菌の活動期から回避する方法として秋播きの時期について検討を加え、さらに確実な防除効果を上げるために薬剤撒布時期について検討したので、その結果を報告する。

試験—1 播種時期について

試 験 方 法

処理区：秋播きは9月15日、10月1日、及び15日、

11月1日の4回に分けて播種。春播きは翌春4月10日に播種にて、慣行法により養苗した。

床替時期：秋播き区は5月4日に春播き区は5月28日にそれぞれ試験区に移植した。

試験配置：1プロット当り100本/3㎡、4反復の乱塊法により配置した。

管 理：施肥及び薬剤撒布（ルベロン加用5—5式石灰ボルドー）は同一基準で行った。尚薬剤撒布回数は6～8月にかけて7回とした。

試験結果及び考察

6、7月及び10月に発病調査を行い、被害度をもとめ、さらに10月調査について統計処理を行った。尚11月1日の秋播区は寒害を受けたので試験区から除外し